

## 森成家文書目録解題

森成麟造（もりなりりんぞう）は、明治17年（1884）に、現在の上越市安塚区真萩平（もおぎだいら）に生まれた。明治39年（1906）に仙台医学専門学校を卒業して、東京長与（ながよ）胃腸病院に勤務した。同病院在任中の明治43年（1910）伊豆修善寺で胃潰瘍を患って療養中だった夏目漱石を治療した。翌明治44年（1911）に帰郷し、高田市で病院を開業したのちも夏目との深い親交が続いた。

森成は、「東嶺」と号して俳諧をよくし、大正6年（1917）12月9日、前年に没した夏目漱石の忌日を期して「漱石忌句会」を主宰した。この句会は、森成が没する昭和36年（1961）まで40年以上も継続した。

森成は、考古学にも強い関心を持ち、大正14年（1925）に、高田師範学校教師だった斎藤秀平らと「上越考古学会」を創立し、上越地域の各地の遺跡を調査し、遺物の収集にも務めた。さらに、上越地方の文化活動の振興に強い関心を持ち、昭和27年（1952）6月「上越郷土研究会」の設立を主導し、自ら会長を務め、機関紙「頸城文化」を発刊した。「頸城文化」は上越地方の歴史研究誌で、現在も継続し、上越地方の歴史研究に大きく寄与している。

森成は、考古遺物の収集に努め、そのコレクションは現在「上越市総合博物館」に所蔵されている。森成のコレクションは考古遺物だけではなく、上越地方の歴史文献、特に近世の高田町方の古文書などにも及んだ。その収集古文書は、昭和22年（1947）近世庶民生活史料調査委員会編『近世庶民生活史料所在目録第一輯』に所載されている。

収集史料の一部が、遺族へ伝承され、平成17年（2005）3月、上越市史編さん室へ寄贈された。この目録は寄贈された史料の目録である。（目録のNo.1は原蔵者のご希望で返却した。）